



エニヴェリ

墮落

Fallen Avery

作画 クマノミの実  
カシワユ





プロローグ…エイヴェリーと言う少女

セレマ王立魔術学院。それはレムリア王国において魔術研究の最先端を走る最高学府である。

貴族や平民といった身分を問わず優秀な素質や才能を持つと認められた者たちが集い、日夜魔術の研究に勤しんでいる。

ある日の麗らかな陽気の午後。そんなセレマ王立魔術学院の人気の少ない一角にて、一人の男子生徒が立っていた。

その、そこまで際立った特徴がある訳でもない、茶髪の男子生徒の名は、ジョン・アーツ。平民出の学院生である。

さて、そんなジョンだが、極めて緊張して張りつめた雰囲気を漂わせており、手鏡で何度も何度も、彼なりに精一杯行ったオシヤレの確認を行っていた。

少し鋭い人間ならば、これだけでジョンがこれから何をしようとしているのかを、察することが出来るだろう。

そう。彼は、この場に愛の告白をする為に来たのだった。

待ち合わせの時間の五分前から、心臓をバクバクと鳴らしながら、呼び出した意中の相手を待っていたジョンだったが、そんな彼の前に遂に待ち人が現れた。

「やあ、ジョン君。いい天気だね」

「え、エイヴェリー先輩……！」

鈴の音の様な透き通った声が、辺りに響く。

現れたジョンの想い人は、こう言っては悪いが平凡な彼には似つかわしくない凄まじいまでの美少女だった。

白に近い紫色の、腰まで届く長髪はどこまでも艶やかで、その眼まなこに浮かぶ金色の瞳はあらゆる物全てを見通すかの様。

顔の造りもまるで人形の如く整っていて、まるで女神を模した彫像の様ですらあった。

彼女の名は、エイヴェリー・トリストス。

このセレマ魔術学院で現在、良い意味でも、悪い意味でも一番有名な人物であった。

良い意味の方は、彼女が非常に優秀な魔術師であると言うこと。

エイヴェリーは、ジョンと同じく平民出の魔術師でありながら、学院に入学をしてからの年間、毎年学年主席を取り続けている天才だ。それに未だ若輩で、学生の身でありながら、幾つもの魔術的功績を打ち立てており、既に王国の歴史にその名が残るであろうことが確定していると言って良い。

悪い意味の方は、彼女が魔術キチ——魔術至上主義者であり、魔術への探究心が行き過ぎている所が多々見られると言うことだった。

無論、王国における魔術研究の最先端であるセレマ魔術学院においては、魔術に対する探究心やプライドが高い者が多いが、エイヴェリーのそれは、その中においても群を抜いていると断言出来た。

その魔術に対する傾倒っぷりは、今この場における彼女の服装を見るだけで簡単に理解する事が出来る。

さて、そこまで言うほどの彼女の服装がどんなものであるのかを説明しよう。

黒いとんがり帽子に、体を覆う黒と紫を基調として、金色の刺繍が施されたローブとマント。

形だけを言うのなら、さほど不自然ではない——いやそれどころか古き良き女魔術師の服装と言って良い。

近年、魔術師であってもオシヤレを気にして、平民出であれば肩出しだの、ミニスカートだのが流行っている事情を鑑みれば、首元から手首・足首までを覆われており、外気に触れているのが顔くらいのエിവエリーの服装は、伝統的で真面目な物だった。

ならば何の問題か？といえは、答えはそのローブとマントに使われている素材にあった。

アラクネの糸。そう呼ばれる貴重な素材がある。

文字通りアラクネ——巨大な蜘蛛の怪物から人の女性の上半身の  
ような物が生えている、極めて凶暴で危険性の高い魔物モンスターが吐く糸を集  
め、様々な魔術的加工を施した素材である。

その糸で編んだ服は、女性にしか効果を発揮しないが、大気中に存  
在するマナをかき集め、肉体に染み込ませることにより、徐々にでは  
あるが魔力の最大値を上昇させてゆくと、極めて有用な特性を持  
っていた。

そのため、アラクネの糸で編まれた服は途轍もなく貴重であり高価  
だ。

手袋程度で、王都に豪邸を建てられる程と言え、その値段が想像  
できるだろう。

そしてあろう事か、エイヴェリーのローブとマントは、そのアラク  
ネの糸を使って編まれた代物であった。

このレベルの物になると、一体いくらになるのか想像するだけで恐  
ろしくなってくる。

魔力の最大値を上げるためとは言え、高々服にそこまでのお金をかけてしまう程だからエイヴェリーは魔術至上主義者と呼ばれている———訳では無い。

いや、それも理由の一つではあるのだが、重要な所はもっと別の所にある。

エイヴェリーの服に使われているアラクネの糸だが、魔力を高める特性以外にも、幾つかの特徴が存在している。

一つは、先程も述べたように、女性にしかその効果を発揮しないこと。

一つは、かなり繊細な素材であり、魔力上昇の効果を発揮するには、外気と肌に触れる状態であることが望ましい——つまりは、上に何か別の素材で出来た服を羽織ったり、下に着込んだりすると効果が著しく落ちるということ。

そして今の話において最も重要な1つは———薄いということ。

それだけ？と思ったのなら、その薄さの程を甘く見すぎている。アラクネの糸の薄さだが、例えばそれを用いて作られたカーテンを100枚目の前にはられたとしよう。

そんな状況であっても、その100枚の先にある光景を何ら問題なく視認出来る……そんなレベルの薄さなのだ。

言ってしまうえばほとんど透明であり、ハッキリ言って衣服の素材としてこれほど適していない物もない。

さて、そしてもう一度確認しよう。

エイヴェリーはそんなアラクネの糸で出来た服を着ている訳である。全身に。

その露出は極めて少ない。なにせ首元から足首まで覆われている訳なのだから。

しかし不思議なことに、シミ一つ無いその綺麗な素肌は、全く隠れてはいなかった。

……もう、ぶっちゃければ、エイヴェリーの服装は実質的に裸同然であった。

アラクネの糸の特性により、下着すら着けていない。

辛うじて、乳首とクリトリスと言った局部だけは、金色の金具に銀のチェーンと紫色の宝石がついているニップルクリップやマロンクリップと言った、これまた別の魔術的效果があるアクセサリーを着けている他、足首から太ももにかけては同じ様に他の魔術的效果を持つ白のハイソックスを着用しているが、逆にエロいだけとはセレマ魔術学院の男子生徒の総意であった。

そんな痴女でもしない服装を性的な意図は一切なく、普段から平然と着こなし。

「恥ずかしくないのか？」と問われても、「恥？それは魔術の探究に役に立つのかい？」と大真面目に返答するが故の魔術キチ。

それがエイヴェリー＝トリストスと言う少女であった。



「それで？ボクに用事があるらしいけど、改まって一体どうしたんだい？」

「あ、そのっ……！」

やって来たエイヴェリーに対して、ジョンは更に焦り散らす。

美人は心で飽きるなんて言われている物だが、この一年間何度も見た筈のエイヴェリーの艶姿にジョンはちっとも慣れておらず、駄目だと思っているのに、彼の視線はエイヴェリーの胸や、下半身にちらり、ちらり、と向けられてしまっていた。

全く隠れていない乳輪が目に入る。クリトリスから伸びている銀の鎖が体を動かすたびにゆらゆらと揺れ動き、止まっている状態では辛うじて隠れているピッチリと閉じた秘密の割れ目がチラっ……、チラっ……！と衆目に晒される。

不審に思われない様に、早く、しっかりと喋らなければ、と思うジョンだったが、股間にばかり血が流れていってしまった様で、全く集中出来なかった。

そんな様子のジョンに対して、自分に向けられている視線に気づいているというのに、全く気にもせず、そして気分を害した風も無く、エイヴェリーは僅かに笑顔を浮かべて話しかけた。

「そんなに緊張しなくて良いよ。ほら、深呼吸をして」

「は、はい！すうー。はあっー」

息を吸い込み、吐き出すたびに、少しだけ気持ちが悪くなり落ちてきた。それと同時に胸に秘めた思いが、更に大きくなっていく。

殆ど無表情でクールながら、こうした時にふと、見せる僅かな笑顔と優しさが何よりもジョンの心を射止めるのだ。

「その、お話なんですが……」

「うん、うん。一体何だい？」

「今まで俺、エイヴェリー先輩には一杯お世話になってきました……！この学院に入学して、右も左も分からなかった俺が、ここまでやってこれたのは全てエイヴェリー先輩のお陰です……！」

「おや、いきなり褒め殺しかい？何、そんなに気にしなくて良いよ。魔術を探究する同士に対しては、当然の事だからね！」

「そんな事無いです！一人も味方が居ないと思って視野が狭まっていた所に、エイヴェリー先輩の親切がどれだけ有難かったか！」

「ふふっ。それなら、その言葉は受け取っておこうか」

セレマ王立魔術学院は、身分を問わずに門戸を開いている……とは言う物の、所属している人間はやはり貴族が多い。

そんな学院にあって、世渡り上手でも無く、(学院基準では)そこまで優秀な方でも無い平民出の生徒であるジョンは、入学当初上手く学院に馴染めていなかった。

そんなジョンを助けてくれたのが、何を隠そうエイヴェリーだったのだ。

魔術キチなどと周囲から噂され、一匹狼で他人の事など気にしないクールタイプの人間に見えるエイヴェリーだったが、意外にも面倒見は良かった。

自分より遥かに魔術の腕が劣るジョンに対して、分かりやすく丁寧  
に、そして優しく勉強を教えてくれたのだ。

だからこそ、ジョンはエイヴェリーの事が――

「お、俺はっ――！そんな優しいエイヴェリー先輩の事が好きになっ  
てしまったんですっ。だからどうか、俺とお付き合ひして下さいっ――  
―!!」

「ジョン君……」

言った。言ってしまった。長引けば長引くほど決心が鈍ってしまう  
と、ジョンは勢いに任せて自分の胸の内をさらけ出した。

エイヴェリーの表情が、穏やかな物から、真剣な物に変化する。

ジョンにはその変化が、彼女がしつかりと自分の言葉に向き合っ  
てくれた証拠のように感じられて、心が暖かくなって――

「キミ、一体何をしに此処学院に来ているんだい？」

「……………え？」

——続くエイヴェリーの言葉で、そんな浮ついた気分のを剥ぎ取られた。

その場に佇むエイヴェリーの雰囲気は完全に悪い方向へと変わっている。

まるで、心地よい春の陽気から、極寒の凍土の物へ。

つい先程までは確かに感じられていたはずの優しさが、今ではすっかり見つかからない。



「ああ、全く。栄えあるセレマ魔術学院を恋人探しか何かの場所だと思っている輩には、本当に困らせられるね！別にキミ達が盛る分には、勝手にすれば良いけど、ボクを巻き込まないで貰えるかな？特に、ジョン君。キミは、ボクが魔術の探究に生涯を捧げていると理解してくれていると思っていたんだけどね……残念だよ」

「うあつ……。で、でも先輩は、俺に優しくてっ……！」

「ああ。したさ、したとも！1つ見縊らないで欲しいんだけど、ボクは魔術の探究に身を捧げているとは言ったが、同じく魔術を学ぶ徒には優しくあろうと、心がけているつもりさ。けれどそれを、下らない男漁りと同列に思われるのは甚だ不愉快だね」

「……………」

すっかり黙ってしまったジョンに対して、しかしエイヴェリーは一切手を緩めることが無かった。

極めて鋭い言葉のナイフが彼の心臓に目掛けて飛んでいく。

「そもそも、キミさあ……。ボクがどういう存在か知っている筈だね？別に隠してないし。それで、これって頭、どうにかしてるんじゃないの？」

「た、確かにエイヴェリー先輩が元男だって、知っています——」  
ジョンの口から驚愕の事実が語られる。

エイヴェリーが魔術キチだと言われる理由その③。

それは彼女が魔術を極めるために、己の肉体を元々の物から自らの手で創造したホムンクルスの物に、移し替えた人間だと言うことだ。  
そしてその元々の性別は男だった。

エイヴェリーが言っている通り、彼女はその事実を全く隠している。なので、ジョンも確かにそれは知っていた。

けれども、彼が最初に会った時には既にエイヴェリーは現在の姿であったので、どうしても実感が薄かったのである。

「でもっ！俺は、そんな事は関係なく、純粹で穢れなく孤高で、けれども優しいエイヴェリー先輩の事が——」

「ああ、良い。もう良いよ。分かった、分かった。純粹で穢れを知らない。ねえ……？ふーん。じゃあ良いよ。——レムリア金貨50枚」

「えっ？な、何を……」

「色々と言ってはいるけど、要はボクを抱きたいんだろう？似たような提案を受ける機会はかなりあるからね。魔術研究の資金にもなるし、その度一晚レムリア金貨100枚で手を打っているんだ。ジョン君には知り合いの誼で半額にしてあげよう」

エイヴェリーの言葉は、彼女が金と引き換えに、今まで何度も抱かれている事を示すもの。

ジョンにはその言葉が全く信じられず、激しく狼狽してしまった。

「う、嘘だっ!?だって先輩は、そう言うのに興味ないって——!」

「うん。確かに、ボクはそう言った抱いた、抱かれただけに、興味はないし、価値も感じていないよ。でも人の言葉を勝手に都合よく解釈しないでくれるかな。興味も価値も感じていないと言うのは、だからやらないと言う意味じゃなくて、有効利用出来るなら全く躊躇わず行う



エイヴェリー・トリストスは、多少裕福な商家に産まれた平民の三男坊であつた。

幼い頃は特に周りとは変わらず、平凡な子供であつたエイヴェリーだが、そんな彼に転機が訪れたのは、魔術というものに初めて触れた時だつた。

跡取りにはなれないエイヴェリーへ、他に食つていける特技が無いかと考えた両親から、試させられた幾つかの習い事の内の一つ。

魔力を練り、術式を構成し、この世の真理を探究する学問に、エイヴェリーはあつという間に魅せられてしまったのだ。

折角、興味が持てる物が出来たのだから、と両親が勉強道具や講師を買い与えてくれたのも相まって、エイヴェリーの生活は魔術・魔術・魔術の魔術漬けに変化していった。

そして、そんな魔術に対して並々ならぬ好奇心を見せるエイヴェリーの方に、魔術の方も応えたのである。

エイヴェリーには他に比類なき、魔術の才能が存在していたのだ。師となった平民出のそこそこの魔術師から、わずか数ヶ月でもう私から教えられることは何も無いと言われるほどの、煌めく才能。

周囲の人間も、此処に来て漸くエイヴェリーがとんでもない天才であることに気が付かされたのである。

そしてそのまま、別の師匠・また別の師匠・そしてセラマ魔術学院への入学と、環境がどんどん変わっていてもエイヴェリーの躍進は止まらなかった。

周囲のレベルはどんどん増して行っている筈なのに、成長の速度がそれ以上に早い。

結局、他の並み居る貴族の生徒を押しつけて、学年主席をアツサリと取った頃には、周囲どころか王都にまで名の轟く、必ず王国の歴史に名を残す大天才だと持て囃されるまでになっていた。

さて、そんな順風満帆に見える人生を送っているように見えるエイヴェリーだが、以外にも一つ深刻な悩みが存在していた。

それを説明するには、まず魔術という物の適正に関して、貴族と平民の違いを説明せねばならない。

例えば、身分を問わず優秀な者に門戸を開いているセレマ魔術学院だが、その在籍者は、貴族が圧倒的に多い。

これは、権力による影響——と言うのも全く無い訳では無いが、純粹に平民より貴族の方が優秀な者が多いからである。

魔力量や、魔術を扱うセンスなどは、完全にでは無いが遺伝する物なのだ。

結果として、優秀な人間の血を積極的に取り入れて行っている貴族と、そうで無い平民の間に差が発生するのは、疑問の余地が無いほどに当然の事であった。

例えば、先のジョンIIアーツの様に、平民の中では神童と持て囃された人間が、セレマ魔術学院の中では、良いところ下の中くらいなんて事は極めてありふれている話なのである。

貴族の中ですら頭角を現せる平民などそれこそ一握りの大天才のみ。

……まあ、エイヴェリーはその数少ない大天才であった訳だが。

しかし、だからこそこの問題は彼にとって頭を悩ませるものであった。

この時点でのエイヴェリーだが、要は恵まれない肉体性能を溢れんばかりのセンスで補っている様な状態であったのだ。

もしも最初からエイヴェリーが大貴族生まれだったのなら、どれほど楽が出来ただろうか。本人としても、自分のセンスに己の肉体がついて行かずに歯痒い思いをしたことは、一度や二度ではなかった。

つまり、それこそがエイヴェリーにとっての悩みであった訳である。では、どうするか。その悩みに対してエイヴェリーが示した解答は、とても簡潔で、しかし驚愕するような物だった。

持って生まれた肉体に不満がある？ならば体を替えれば良い。

理屈的には確かにそうだろう。けれどもそれを大真面目にやろうとする人間がどれだけ居るのだろうか。しかし少なくともエイヴェリーは行った。

ホムンクルスによる優秀な肉体の作成と、それに対して己の魂を移し替える作業。

それこそがエイヴェリーが考えた己の悩みに対する解決策であった。

まず、優秀な肉体の制作だがこれは、とても簡単に完了した。

もとよりホムンクルス製造において、最も問題となるのはそこに人造の魂を発生させることである。

そこを抜きにして、ただ肉体を造るだけならば（エイヴェリーレベルの大天才にとっては）然程、難しくはない。

まあ、魔術探究に限度を設けないエイヴェリーが、肉体をできる限り高性能にしようと極めて貴重な魔術素材などを湯水の如く使用し

たため、金銭的な面においては、魔術研究の成果により極めて高給取りであった彼女の財布がすっからかんになるどころか足が出る事態となったのだが、技術的な問題は出なかった。

問題となったのは魂の移し替え作業のほうである。

元々、ホムンクルスによる新たな肉体の作成と、それに意識を移すことによる擬似的な生まれ変わりは、理論的には固まっているもので、成功例も存在していた。

しかしだというのに、それが一般的となっていないのは、極めて実行難度が高いからである。

やはり、自分の肉体を別のものにすると言うのは、とても危険なことであり、大きな拒絶反応が出てしまうのだ。

それを乗り越える為に必要とされるのは、極めて他と隔絶した魔術センスに、強い精神力。それを持つものだけが、魂の移し替えを成功させられるのである。

そして、失敗した場合の代償は、その命である。一発勝負でミスってしまえば、物言わぬ肉塊になって死んでしまうのだ。

だからこそ、どんな魔術師であっても軽々と手を出せる物ではなく――しかし、エイヴェリーはアツサリと行い、そして成功させてみせた。

こうしてエイヴェリーは彼から彼女になった訳である。

そしてこの成功を持ってエイヴェリーの栄光は確かな物となった。跳ね上がった肉体性能を存分に生かして積み上げられていく魔術的偉業の数々。

いよいよを持って、レムリア王国における魔術師の最高位である『王冠』の位を平民の身で初めて、しかも若輩で勝ち取る程となったのだ！

しかしこの様に、ほとんど完全に成功した肉体の変更だが、エイヴェリーのちよつとした良いところと、悪いところが存在していたのである。

「はあっ……。一体、何人目だろうね、あの類は。全く嫌になつてくるよ。まあ、頭の緩い猿から絞れるのは悪くないけども」

喚き散らしながら去っていった、もはや名前を覚える価値も無い後輩の背を見送って、エイヴェリーが呆れたように呟いた。

まず肉体を変えて良かった点だが、男の目を惹くようになったことである。

そもそもエイヴェリーが新しい肉体の性別に女を選んだ事に、性的な理由は一切ない。

男と女の魔術的な適正の性差。どちらにした場合の方が、自分の魔術の腕を上げるのに適しているかを研究した結果、僅かばかり女の方が上だったからそうしたまでだ。

容姿が優れているのも、単純に自分の魔術を使って作った作品に、手抜かりがあつてはならないという凝り性故である。

しかしながら、そうして出来たエイヴェリーの新しい肉体だが、極めて男の劣情を煽るものとなり、それが彼女にとっては都合の良い物となった。

なにせ、少し股を開いてやれば、大金やら希少な魔術素材やらを融通してくれる援助者が何人も出来たのである。

一時的に出来ていた借金の返済にも役立ち、エイヴェリーとしては笑いが止まらない話であった。

「けれども、勝手に自分たちに都合の良い思いを押し付けられるのは、勘弁してほしいね」

そして肉体を変えて悪くなった点だが、これもやはり男の目を惹くようになった事であった。

エイヴェリー本人としては、全くそんな気は無いし、そもそもそんな事を言ったことは一度も無いのだが、彼女のクールな態度や容姿が一部の男たちにとっては、純粹で穢れを知らない理想の女子の物に見えるらしい。

だからこそ、先程の様な告白を受ける機会はかなりあったし、それで一部の女子からやっかみを受けた事もあった。

ハッキリ言つてエイヴェリーからしてみれば、キミ達に興味なんて微塵も無いから他所でやっていてくれ、という話である。

だから、そんな告白をしてきた馬鹿には軒並み先程の様な提案をしてやるのだが、大概、そんなの自分の思つていたエイヴェリーじゃない！と勝手に失望されるのだから呆れたものだった。

（頭に精液しか詰まっていけない性欲猿モンキも、勝手に理想を押し付けてくる処女愛好者ユニコーンも、それに群がる女達も全部下らない。恋も、愛も、性欲も。男だ、女だ、も全部、全部、魔術の探究に比べたら価値の無いものなのね）

エイヴェリーは、もはやどうでも良い後輩の事を頭から消して、悠然と学院を歩いていく。

途中、極めて扇状的な自身の格好に突き刺さる男の視線を何度も感じたが、全く意に介さない。

なぜなら、論争で時間が取られるのも面倒だから口には出さないが、先程の思いがエイヴェリーの本心なのだから。

恋も愛も性欲も。男だ、女だ、全て魔術に比べれば下らないと鼻で笑う、魔術至上主義者。それがエイヴェリートリストスと言う元男の現少女であった。

——だから、そう。

この時は、未だ誰も。それこそエイヴェリー自身ですら予想していなかった。

こんなクールで達観している元男の美少女であるエイヴェリーが、これから僅か数ヶ月の間で、チンポに完全敗北して分からせられて。自分が馬鹿にしていた性欲のことしか頭にない様な男のラブラブオナホ妻にさせられるなんて——!!

## 第一章…淫紋と雌奴隷契約

「エイヴェリーちゃん。俺の女になってくんね？」

「……………は？」

後輩であるジョン・アーツの告白を無残に断った翌日の事。

エイヴェリーは今度は、同級生の男子の一人に呼び出されていた。目の前には、どこか、なよっ……………としていて、頼りない雰囲気のジョンとは対象的に、日に焼けた肌とガツシリとした体格を持ち、女と遊びなれてそうなチャラい雰囲気を出す短い金髪の男が立っている。

昨日の事もあり、いきなり一方的に告げられた待ち合わせの約束を、すっぽかすかどうかと考えて、それでもやって来た末にこれ。

エイヴェリーは早くも、此処に足を運んだ事を後悔していた。

「色々と言いたい事はあるのだけれど、まずは知性ある人間として自己紹介くらいはしてくれないかな」

「あれあれ？もしかしてエイヴェリーちゃん俺の事知らない感じ？  
同級生なのに酷いな」

「……………礼儀として、だよ。少なくとも、キミとボクは会話すらした事が無かったと記憶しているんだけどね」

「分かった、分かったよ。俺はアンドレⅡフォンⅡオエンクスだよ、よろしくね」

「そうか、ボクはエイヴェリーⅡトリストスだよ」

（オエンクス家。確か、家格は伯爵だったか。数代前までは侯爵だったが、没落したとか。跡取りも馬鹿息子だと噂されてるが……やれやれ、これは噂が正しいようだ）

貴族の事情など、心底どうでも良いと思っているエイヴェリーだったが、知らずに厄介事に巻き込まれる方が面倒な為、ある程度の情報は仕入れ済みであった。

アンドレⅡフォンⅡオエンクス。没落貴族の跡取りで、真面目に勉学に励まず、夜の街を遊び歩いてばかりいる、どうしてセレマ魔術学

院に入学出来たのか分からないバカ貴族——などと、聞こえて来る噂は悪いものばかりであった。

あまり人を噂で判断することの無いエイヴエリーだが、こればかりは確かに……と頷くより他なかった。

「それで自己紹介も終わったし話を戻すと、エイヴエリーちゃんを俺の女にしたい訳よ」

「頼むから知性を感じられる会話をしてくれないかな。………それ

はつまり、ボクの一晩を買いたい、とそう言うことなのかな？」  
頭が痛い、とばかりに額に手を当てて、ぞんざいに返答するエイヴエリー。

通常、普通の相手にはそれなりに丁寧に接するエイヴエリーだったが、もはや目の前の男に対して礼儀を払う意味を全く見いだせなかった。

「一晩？違う、違う！俺の女<sup>メス</sup>って言ったろ？エイヴエリーちゃんには、雌奴隷として俺に尽くして欲しいわけよ」

「……………はあ。話にならないな。悪いが猿語は理解できないんだ。遠くで勝手にキーキー鳴いていてくれ給えよ」

「あれあれ？貴族の俺にそんな事、言っちゃって良い訳？」

「そう思うなら、無礼討ちでも何でもしてみるか？後悔するのはキミの方になると思うけどね」

いよいよもって、権力をチラつかせ始めたアンドレに対し、エイヴェリーは不敵な態度を崩さなかった。それは虚勢でもなんでも無い。

唯の平民ならまだしも『王冠』の位の魔術師であるエイヴェリーの権力は、上位貴族にも匹敵する。

こんな事で、権力など使おうものなら潰されるのは間違いなくアンドレの方だった。

「冗談、冗談だって！そんな怖い顔しないでよ、エイヴェリーちゃん。何もタダで、って訳じゃないからさ。一杯、お金上げちゃうよ？」

「ふうん」

(さて、没落貴族如きにどれだけ出せるのかも疑問の所だけど。どちらにせよ、答えは一つだ)

「悪いけどそう言う話なら失礼するよ。キミには理解出来ないかもしれないけど、時間は金では買えないんでね」

「ちよ、エイヴェリーちゃん!？」

エイヴェリーは、アンドレに背を向けてその場をスタスタと去っていく。

別に提案相手が己に失礼な言動を繰り返したアンドレだったから、と言う訳ではない。

エイヴェリーが金や、魔術素材で一晩を許しているのは、それがコスパが良いからだ。

これが長時間の拘束となれば、魔術の探究に支障が出るため、最初から考慮に値しないのだ。

アンドレの静止の声を無視して、エイヴェリーは歩いて行く。

そしてそのままその場を去ろうとして――

「……………相伝魔術」

「——なんだって!？」

——ボソツ、と呟かれたアンドレの言葉に、足を止めて振り向いた。その様子を見て、アンドレの顔に厭らしい笑みが浮かんだ。

「ああー。やっと興味を持ってくれたよ、エイヴェリーちゃん。いきなり帰ろうとしちゃうんだもの、驚いたよ」

「そんな事はどうでも良い。キミ、今なんて言ったんだい」

「そんなに真剣に確認しなくたって、誤魔化したりしないって。相伝魔術だよ。そ・う・で・ん・ま・じゅ・つ。お金じゃ心を動かされないみたいだけど、これならどうかな、ってね！」

「冗談では済まなくなるよ……………!」

「勿論。俺は最初から真剣だよ」

相伝魔術——そう呼ばれる魔術がある。

文字通りの一子相伝。古い家に脈々と受け継がれている一般にはその詳細が公開されていない魔術の事なのだが、詳しく説明をしよう。

そもそも、今でこそセレマ魔術学院の様に、国を挙げての研究がされている魔術だが、元々は一つの家や、一族など、狭い範囲での研鑽が為されていた。

そこで完成した魔術で未だ一般にその構成が公開されていないものを相伝魔術と呼ぶ訳だ。

勿論、魔術の研究が進むにつれ、相伝であったものがそうで無くなることもある訳だが、しかし未だに相伝である魔術も多く、それらは極めて価値のある財産として貴族などの間で慎重に隠されていた。

時には、一つの相伝魔術を巡って戦争が起きたり、別の国では、国中の相伝魔術を自分の元に提出するようにお触れを出した国王が、すぐさまクーデターを起こされてアツサリと処刑された事もあると言え、その貴重さが分かるだろうか。

紛れもない大天才ではあるが、平民生まれのエイヴェリーでは持ち得ない、魔術関係においては数少ない物の一つである。

「ほらこれ、目録。目ぼしい効果の奴は取られちゃって、俺的には大したもんが残ってないけど、エイヴェリーちゃんにとっては違うでしょ」

「……………！」

そうしてアンドレが渡してきたのは、レムリア王国からそれが相伝である、と認められた証がついている相伝魔術の目録であった。

エイヴェリーは、その目録を捲っては、捲っては、食い入る様に読み込んでいく。

元々、侯爵家であり、時の宰相すら務めた歴史を持つオエングス家とあって、その相伝魔術の数は多かった。

ただし、アンドレの言う通り没落に際して有用な相伝魔術をかなり筆られたのか、書かれている魔術の効果はどれも微妙なものばかりであった。

しかしそれを持って価値がない、と言うのは早計である。

相伝魔術とは謂わば、一般には流通していない未知の素材なのだ。

だからこそ、一見して価値のない物でも蓋を開けてみれば凄まじく有用な使用方法が見つかる事が多々あるのだ。

分かりやすい例を挙げれば、『肩を良い感じに叩いてくれる』なんてどうしようもなく見える効果の相伝だった魔術が研究の結果、山をも砕く、大規模攻撃魔術の最後の部品として使用された、なんて事もあるのだ。

或いは、魔術の探究こそを自分の生きる意味と定めているエイヴェリーにとっては、最初から有用な効果を持っている相伝魔術よりも価値のある研究材料で、喉から手が出る程に欲しい物だった。

相伝魔術はどれほど下らなく見えるものでも、非常に価値が高く、それがこれほどの量となれば、もはや金と引き換えに出来るものではない。

少なくとも、女一人を抱くだけの抱かないだの、と言った話の天秤に載せて良いものでは決して無いのである。

「エイヴェリーちゃん。これを賭けて、俺と勝負をしてくんない？」

「……………話を聞こうか」

あろうことか、アンドレはそれほどまでに貴重な相伝魔術を賭けの対象にすると言う。

馬鹿貴族此処に極まれりだが、エイヴェリーとしては有り難いことこの上ない。

先程とは打って変わって、真剣に話を聞くエイヴェリーだったが、そんな彼女に告げられたのは極めて下衆で下劣な提案だった。

\*\*\*\*\*

「一ヶ月の雌奴隷契約、ね」

「そう！俺のウルトラテクでエイヴェリーちゃんをメロメロに出来たら俺の勝ち、ならなかったらエイヴェリーちゃんの勝ち、って勝負だよ！」

アンドレが語った『勝負』の内容を纏めれば、こんな感じであった。

一ヶ月間、エイヴェリーはアンドレの性奴隷として彼に抱かれ続ける。

その結果、心が折れてしまったのならアンドレの勝ち。エイヴェリーは一生アンドレの雌奴隷となる。

心が折れなかったのなら、エイヴェリーの勝ち。晴れて相伝魔術を入手出来る、と言った物である。

「どうする、受ける？ 受けない？」

「ふむ」

（かなり危険な賭けであることは確かか。——だけどボクの答えは決まっている）

その提案が罠であるとはエイヴェリーも当然理解はしている。

しかしながら、相伝魔術を天秤に載せられたのなら、乗らないと言う選択肢は彼女には無かった。

最も、だからといって無策で受ける等という愚を犯す気はサラサラなかったが。

「良いだろう。キミの提案を受けよう。ただし、ルールと保証はしっかりとさせて貰う。——『破れぬ誓約』を結んでもらおうか。そして、魔道具や薬などの使用も禁止だ」

（まずは、泣いても喚いても逃げられないように、逃げ道を塞がせて貰うよ）

「——え」

『破れぬ誓約』。それは、互いに取り決めたルールを破れなくする魔術である。

エイヴェリーとしては、これを用いて後で知らぬ存ぜぬをさせられぬ様にする形だ。

「『破れぬ誓約』。それに魔道具や薬などの使用禁止って……」

「おや、何かご不満かな」

（大方、強力な魔道具辺りでどうかしようと言う魂胆だろうけど、そう簡単にはいかせないよ）

「いや、その……」

途端に言葉に詰まったアンドレに対し、エイヴェリーは思いっきり小馬鹿にする様に嘲笑った。

「はあ………。残念だな、どうやらご自慢のウルトラテク……ぷつ。いや、済まないね。少し咽ただけさ。こほんつ。ご自慢のテクニックとやらは嘘だったみたいだね。それなら、ボクは失礼するよ」

「——なっ!?! テメェっ!」

「おやおや、急に顔を紅くしてどうしたのかな」

(良いぞ、そのまま乗ってこい)

「分かったよ、大枠はその条件で良い。言った通り、俺のテクでメスに墮としてやんよ」

「いやあ、流石だよアンドレ君。それでこそ、男だ。これはボクの身も危ないかも知れないね」

「ふん。言ってる。それじゃあ、詳細な条件を決めようぜ」

「うん。分かったよ」

果たしてどちらが乗ったか、乗せられたのか。

この場でそれはハッキリとせず、しかし互いの命運を賭けた勝負の賽が振られた事だけは確かだった。



### 『破れぬ誓約』

誓約者…エイヴェリー||トリストス及びアンドレ||フオン||オエングス。

誓約内容…エイヴェリー||トリストスはアンドレ||フオン||オエングスの性奴隷として10時間×30日分の300時間を過ごす勝負を行う。勝敗の判定方法…勝負の開始時に、エイヴェリーの身に、自らの心の折れ具合を可視化する淫紋を刻む。300時間以内にそれが100%になった場合は、アンドレの勝利、ならなければエイヴェリーの勝利とする。敗北した者は担保とした物を相手に捧げなければならない。エイヴェリーの担保…自身の人権の全て

アンドレの担保・オエンクス家の相伝魔術の全て

### 特記事項

- 一…互いに魔道具や薬、協力者などと言った、本人の力以外を使うことを禁じる（ただし、エイヴェリーの普段の服装は認める）。
- 二…魔術の使用は制限されないが、勝負前から準備しておいた術式を使うなどといった行為は禁じる。
- 三…両者ともに、相手に危害を加える事を禁じる。これには、別の人間を唆して動かす事なども含まれる。
- 四…基本的に、性奴隷時間中のプレイの決定権はアンドレにあるが、肉体的・魔術的に過度な危害を加える様なプレイは禁じる。
- 五…睡眠を取らせない。食事を取らせない。などのあまりに長時間の拘束を禁じる。
- 六…勝負の制限時間である300時間のカウントが進む条件は性行為を行っている事であり、休憩中などはカウントが進まない。ただし、これを利用して勝負を徒に引き伸ばすことは禁ずる。

七..勝負中の住居は、アンドレが提供するものを使う。

八..淫紋の侵蝕が50%を超えた場合、アンドレ側は1つだけ魔道具か薬を扱える、ただし事前にエイヴェリーが審査した物に限る。

九..使用可能となる魔導薬は『覚醒香』（エイヴェリーの許可取得済み）

十..性行為の最中に上記の特記事項に反さず、ただの快楽や自己の過失に基づきエイヴェリーがその意識を消失させた場合、アンドレは行為を止める義務を持たず、またその時間中は勝負の制限時間が進まない。

十一..両者の間で合意が為された場合に限り、以上の契約に反した行動を行える。

以上を持って此処に破れぬ誓約を結ぶ。



先程から数刻後。エイヴェリーとアンドレの二人の姿は、アンドレが勝負の場として用意したと言う家の中にあった。

曰く、勝負中は此処に住んで貰うとの事である。

そして今二人が居るのは、sexを行う為に用意したと言うキングサイズベッドが置いてあるいかわしい部屋であった。

壁には普通の時計とは別に、勝負の残り時間がいくら残っているのかを分かりやすく表す特注の時計が掛けられている。

「さて、必要最低限の家財道具も、暫く学校に出ない旨の連絡も済んだし、そろそろ始めようか」

「おっ、エイヴェリーちゃん、ノリノリじゃん。実は俺とSEXするのが楽しみなんじゃない？」

「まあ、確かに。終われば相伝魔術が入ると言う意味では、楽しみだとも」

「……自信満々じゃん？」

「自信がないのにこんな勝負を受ける方がどうかしていると思わないかい」

「それもそっか」

「それよりも、何時までごちゃごちゃと喋っているつもりなんだい？開始前に少しでもボクを疲れさせようとする魂胆なら、せせこましいと言わざるを得ないけれど」

「そんなつもりはねえよ。ただ、これからよろしくやる仲間だし楽しくお喋りしようぜ」

「申し訳ないけど、ボクに宜しくやる気は無いよ。ああ、勿論？制限時間を消費してでもそういうプレイがご所望とあらば、誠心誠意演技をさせて貰うつもりだけどね。ただ、メロメロにしてくれるらしいと期待していたのに、それでは少しだけ拍子抜けしてしまうけどね」

取り付く島もないとは正にこの事だろう。皮肉気な態度を全く崩さないエイヴェリーに、アンドレはまいった！と言わんばかりに、両手を軽く上げた。

「分かった、分かったよ！さっさと、始めりゃあ良いんだろ？」

「おや、急かす様な形になって悪いね」

「けっ、良く言うぜ。後になってこの平和な時間を少しでも長く噛みしめておけば良かった……って後悔するぜ？」

「それは実に結構。その時を楽しみにして待っておくよ」

「……けっ！ああ良いよ、分かった。それじゃあ淫紋を刻むからとつとと股をさらけ出せや」

「はい、どうぞ」

「うお……！」

「……？どうしたんだい？急に停止して」

「いや、何でもねえっ……！」

エイヴェリーがローブの裾を持ってたくし上げて下半身を露出させた。

元々、殆ど全裸も同然だった上に、散々生意気を言っている相手。しかしだというのにエイヴェリーの肌はとても綺麗で艶めかしく、

アンドレは思わず生唾を飲み込んでしまった。

それを誤魔化そうとでもするかの様に、彼はそそくさと己の人差し指をエイヴェリーの下腹部に突きつけた。

「それじゃあ、行くぜ？淫紋が刻まれたらゲームスタートだ」

「望むところだとも」

その言葉を合図として、アンドレの人差し指の先端にピンク色の怪しげな光が灯る。

その光はエイヴェリーの下腹部に吸い込まれるように消えていき、それと同時に彼女の下半身に淫らな紋様が刻まれる。

それこそ淫紋——ハートを象った、ピンク色に光る淫らな印。



「……………ん」

「へへっ……………！終わったぜ。淫紋を刻まれた感想はどうだ？」

「特にどうとも。どうせ一ヶ月後には消える印だからね」

すまし顔で放たれたエイヴェリーのその言葉に、アンドレはい……！と笑みを浮かべ、淫紋の中心をトントンと軽く叩いた。

そこには一際大きなハートが描かれていたが、しかし中身が塗りつぶされておらずに肌色のままだった。

「エイヴェリーちゃんの心が折れるたびに、このハートの中身がピンク色に塗りつぶされていく。全部塗りつぶされたら淫紋は二度と消えず、エイヴェリーちゃんは俺の奴隷だ。ああ、愉しみだぜえ、その時が！」

「ああ、楽しみだとも、ボクが相伝魔術を手に入れられる瞬間なんだからね。けれども残念だね、この印の完成形を拝めることは一生ないんだから」

エイヴェリーとアンドレ。

〜人とも自らの勝利を欠片も疑っていない表情で笑い合う。

果たしてその顔が屈辱に歪むのはどちらなのか。

——こうして、エイヴェリーの淫辱いんじよくの宴が始まったのだった。

淫紋完成度……0%

## 第二章…余裕

「んっ……♡♡ふうっ……♡♡」

陽の光をカーテンで遮断し、意図的に光量を絞った灯りにのみ照らされた、どこか妖しげな雰囲気な部屋の中。

くぐもった、女の快楽に濡れた声が響く。

部屋に置かれた、寝心地の良さそうな大きな白いベッドの上で、  
組の男女が絡み合っている。

それはエイヴェリーと、アンドレであった。

「人は早速、取り決められた性交を始めていたのだ。

「あっ……♡♡♡」

アンドレの大きな『雄』の手が、あつてない様な透け透けの服の上から、エイヴェリーの美乳を好き放題に揉みしだく。

そしてエイヴェリーの口から飛び出すは『雌』の声。

「人がセックスを始めてから数十分が経過している訳だが、アンドレの方は、成程確かに性技に自信ありと言うだけの事はあった。

最初は体の末端から、そして徐々に中心へと向かっていく彼の愛撫は見事なテクニクで、今まで何人もの女を鳴かせてきたのだろう、と確信させる物である。

……反面、些か拍子抜けなのが、エイヴェリーの方だった。

そこまで激しく乱れているという訳でこそ無い物の、ご覧の通りその口からは時折、淫靡な声が漏れ出してしまっている。

しかも、ぴっちり♥♥と閉じた、美しいオマンコが、ぬらぬら♥♥と透明な液体によって濡れ、光を反射して薄く光っているのを鑑みれば、彼女が『雌』の快楽を味わっているのは明白だった。

それ自体は決して悪いことでは無い。……が、勝負を始める前にあれだけ、自信満々に己の勝利を謳っていたいたのを踏まえると、正直情けないと言わざるを得ないだろう。

「ふーん、エイヴェエリーちゃん。あれだけ言ってた割には、かなり感じちやつてるじゃん？」

そんな彼女に対し、アンドレの口から揶揄いの言葉が飛び出した。もしもこれが愛し合う二人の睦み合いだったのなら、品の無い行いだろう。

しかしながら、たった今行われているのは、方法こそ淫らな物ではあるが、互いに命以上に重要な物と、尊厳を賭けた真剣勝負。

アンドレ側の勝利条件が、エイヴェエリーの心を折る事である以上、寧ろ当然の行いであるとすら言えるだろう。

よって気になるのがエイヴェエリーの対応。

痛い所を突かれた、と羞恥するのか。こんな物何でもない、と虚勢を張るのか。

その反応如何によって、これからの趨勢が決まると言っても過言では無いだろう。

「確かにかなり気持ちが良い。実に素晴らしい事だね」

「あ？」

注目の反応。その答えはまさかの“肯定”だった。

エイヴェリーは恥ずかしがる訳でも、誤魔化す訳でも無く、自分がアンドレの手によってメスの快楽を感じさせられたと、アツサリ認めたのである。

「……それについて何か言う事は無いのかよ」

「ふむ？性技が随分とお上手なんですね、とでも言っていて欲しいのかい？まあこの体になってから、『性豪』なんて物を自称する人間とはそこそこ縁があるけど、半分くらいは権力と金の力にモノを言わせているだけの奴だったからね。そう言う意味ではキミは確かに性の実力があるんじゃないかな。ボクはともかく、一部の女にとっては魅力的に映るかもしれないね」

「そうじゃなくってよお、気持ち良くさせられて、悔しい！とか無いのかよ」

どうにもピントのズレた事を言ってくるエイヴェリーに、アンドレ

が遂に核心的な質問を投げかけた。

その言葉にエイヴェリーが、は？とでも言いたいような怪訝な表情を顔に浮かべた。

「気持ち良くさせられて悔しい？そもそも今回みたいな性交の目的は、子供を作る事じゃ無くて、快楽を貪る為の物だろう？快楽を得るための行動を行って、その目的通りに快楽を得て、一体何が悔しいと言うんだい？余程常識外れに乱れさせられたなら兎も角、常識的な範囲で感じさせられた所で唯の生理的反応だし、寧ろ感じない方が不感症——病気とまでは言わないが体の異常だろう。この体はボクの魔術の腕の粹を集めて作った自信作さ、そんな『異常』はないんだよ」

「……そりゃあ理屈の上ではそうかもしれないけどよ。実際は、元男なのに男に喘がされて……とか、こないけ好かない奴に……とか、色々と感じるもんだだろうがよ」

アンドレの言葉に、エイヴェリーはウンザリしたようにため息を吐いた。

「……はあつ。何というか、キミたちって、何時もボクの事を性に潔癖な妖精か、仙人か何か、とでも決めつけるよね。そもそもそんな風だったらこんな勝負なんて乗らないに決まっているだろう。ないよ、そんな拘り。好んでやる事は無いけど、必要とあらば幾らでも使う程度のモノさ」

「全ては、魔術の研鑽の為に、ってか」

「特に隠すこともなく、最初からそう言っているし、そもそもそう言った事で屈辱を感じるならこんな服は着ないと分かりそうなモノなんだけどね……どうにも皆、勝手な自己解釈を挟むのがお好きなよう  
で」

身に纏う透け透けの黒いローブをひらひらと見せながら、エイヴェエリーは呆れた様に呟いた。

エイヴェエリーは、魔術に対する拘り、そして他者に対するキツパリとした態度から、プライドが高く、愛だの性だのに縛られない浮世離れた人物だと見られがちだ。

それは決して間違いでは無いのだが、正確でも無い。

エイヴェリーと言う人間の性格を、より詳細に表すのなら物事の興味に対する比重が偏っており、割り切りが凄まじい人物と言えるだろう。

興味のある物事——今で言えば魔術——に対する熱意はとても大きく、プライドも高ければ他者に譲る事も無い。しかし反面、それ以外の物事に関してはさほど拘る事も無く、俗にいう普通のプライドが高い人物なら死んでもやらない様な事を、アツサリ行ったりもする。そもそもそんな所にプライドがあるなら、魔力を高める為とは言え、全裸も同然の恰好なんてする筈が無いだろう、と言うエイヴェリーの言葉は、いちいち最もだ。

ただそれでもなお勘違いする者が後を絶たないのは、エイヴェリーの容姿が故だろう。

それこそ妖精染みたその美貌は、実質的に裸に近い痴女服を着ていてもなお、淫靡さと同時に幻想的な雰囲気醸し出してしまうのだ。

「ふーん。ま、相伝魔術が代価とは言え、こんな勝負に乗ってくれるぐらいだもんな」

「如何にも、と言っておこうかな。何度か言ったけど、別に煽りじゃなくお望みなら勝負の最中に奉仕する事ぐらいは構わないよ。それにキミがいきなり一生涯、性奴隷に！と来たものだから言う暇も無かつたんだけどね、期限付きでかつ魔術の研鑽の時間を取らせてくれると言う条件なら、そうだね……1年、いや10年くらいはキミの性奴隷になっても構わないよ？」

「……………本気で言ってるのかよ」

「こんな事で冗談を言う程、悪趣味なつもりは無いよ。これでも一応、相伝魔術と言う、極めて貴重な物を賭け<sup>ベット</sup>してくれた事に感謝しているんだよ？そもそも魔術の研鑽が出来なくなるといふ本末転倒な条件以外なら、性奴隷云々以外でも出来る限りの譲歩はするさ。何なら、今の時点なら勝負を取り下げて、そんな風な契約に変えても構わないよ？」

「――――」

軽く言葉を放っているエイヴェリーだが、言っている内容は本気も本気だ。

彼女に取って己の貞操と言うのは、本当にそんな風に軽々しく対価として差し出せる程度のモノでしかない。

それに、これもやはり、魔術に対する熱意や、他者を見限った場合は氷点下の態度を取るが故に勘違いされがちなエイヴェリーだが、存外に義理堅く、また公平だった。

そもそも、自分の体を新しく造ったり、貞操を売ったりはする物の、他者を実験台にしたり、罠に嵌めたりなんて事に手を染めた事は無いのだ。

何というか、良識のあるマッドとでも言うべきか。

今回の事も、彼女からしてみれば、間違いなく勝てる勝負で、落ちている黄金を拾うだけの棚ぼただだ。

相伝魔術

しかし、それをラッキー！とただ享受するのではなく、忠告と代替案を示して上げるくらいの度量が彼女にはある。

少なくとも、今の提案をアンドレが受け入れたのなら、エイヴェリーは本当に10年間、彼の性奴隷になるつもりだった。

「……………随分と魅力的な提案ではあるけど、遠慮しておくぜ。奉仕も、期限付きの性奴隷の方もな。俺が望む結末は、エイヴェリーちゃんを完全に墮として、モノにする事以外にはねえっ！」

「ふうん。ま、別にボクの方は一向に構わないよ」

突然、降って湧いた好条件に、流石に心動かされた様子のアンドレだったが、それでも勇ましく断つてのける。

対するエイヴェリーはやはり無感情に受け入れる。

いくら何でも、しっかりと説明して尚、断った相手に、それでも慈悲をかける程のお人好しでは無い。

「さて、それなら遠慮はいらないね」

そんな風に呟いたエイヴェリーは、己の人差し指を立てて杖の代わりの様に軽く振った。

その途端、ベッドから離れた場所に置いてある本棚。そこに入れられている魔導書の内の一冊が、独りでに浮かび上がって移動して、エイヴェリーの手の中に収まった。

そしてエイヴェリーはあろうことか、ベッドの上でうつ伏せになり、手にした魔導書をパラパラと捲りながら、見始めたではないか！

「……何のつもりだ？」

「いや、何。キミの男らしい自信の前に、変な忖度は逆に失礼になるかと思っただけ。ああ、勿論！ボクの体は契約に反しない限りで、好きに使ってくれて構わないよ？それにまあ、きつと直ぐにこんな物魔導書を読んでいる余裕なんて無くしてくれる事だろうしね？」

「上等だ……！」

色々と薄っぺらい建前を並べ立ててはいる物の、要は「お前とのセックス、つまらないから本読んでるわ！」と言う煽りでしかない。

アンドレの額にピキリ、と青筋が浮かぶ。

今すぐ止める、と言えば止めさせるのは容易だろうが、それでは余りにも情けないだろう。

つまる所これは、エイヴェリーが言った通りに、セックスの快樂で彼女の生意気な余裕を打ち崩せるか、という話なのだから。

先ほども述べたが、最終的にエイヴェリーの心を折るのが、アンドレの勝利条件である以上、ここで引く様ではお話しにならない。

度重なる愛撫の効果によって、エイヴェリーのオマンコはぬらぬら♡♡と濡れている。

個人的にはもう少しねちっこくやる方が好みではあるが、準備は万端。

アンドレは、エイヴェリーのぷりっ♡としたケツをガシツ……!と鷲掴みにし、彼女のオマンコに自身の熱々の肉棒を押し当てた。

「親切心で、丁寧にはぐしてやるつもりだったけど、そんな遠慮はいらないみたいなんでなっ……！ぶち込ませて貰うぜ、エイヴェリーちゃん」

「おや、好きに使って構わない、と言った筈だけど、聞こえていなかったのかな？」

「泣きをみんなよ——!!」

尚も、余裕の声色で、ただペラペラと魔導書を捲っているエイヴェリーの態度にアンドレの堪忍袋の緒が切れた。

彼はその苛立ちをそのままぶつけるかの如く、自身のチンポをエイヴェリーにぶち込んだ。

どちゅっっっっっっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥なんて言う擬音が鳴ったかに思える程、激しい勢いで熱くて硬いデカチンが、オマンコの中に挿入された。

「おっ……♥♥ほっ……♥♥♥♥」

流石は今まで何人もの女を虜にしてきたメス殺しのデカチン。

それはエイヴェリーのオマンコを力強く掘削し、彼女の口から『雌』の喘ぎ声を上げさせることに成功した。

それ自体はお見事。ヤリチンの面目躍如と言えるだろう。

だが、しかし……。

「んっ♥♥いや、流石だね。言うだけの事はある。ここまで奥をほじくられるのは中々に無いよ」

「ぐおっ……！っ……！」

攻め立てるアンドレと、攻め立てられるエイヴェリー。

攻められている側のエイヴェリーは、ある程度の快楽を味わされたとは言え、相手の一物を論評したり、相も変わらず魔導書のページを捲る手が一度も止まっていなかったり、と未だ余裕は綽々だ。

まあ、色んな意味で本番は始まったばかり、決しておかしな事とは言えないだろう。

そしてならばこそ、不可解なのはアンドレの方であった。

生意気な挑発を繰り返すエイヴェリーに、メスとしての態度を分かってやらせよ！とばかりに荒々しくチンポをぶち込んだアンドレ。

けれど、勢い良かったのはそこまで。エイヴェリーのマンコにチンポを挿入した直後からアンドレは、攻め立てている側だというのに、苦し気な表情を顔に浮かべながら、肩で息をして必死で何かに耐えている様子だった。

「な、なんつーマンコしてやがんだっ、チンコが溶けるかと思ったぜ……！」

「おやおや……。お見事。いや、これは皮肉では無いよ？何せこれまでは挿れただけで、射精する男が大多数だったからね」

アンドレが耐えていたのは――快感。

金と権力と溢れる性欲に身を任せて、数多の女を抱いてきた筈の彼が、現在、まるで初めて女とセックスをした童貞の様に、オマンコにチンポを挿入しただけで射精をしまいそうになっているのを必死に耐えているのである。

それも偏にエイヴェリーのオマンコが気持ち良すぎる所為であった。

アンドレがこれまで抱いてきた女の内には、俗に名器と言われる様なオマンコを持っていた者も居た。

けれどもその時に経験したモノと比較しても尚、エイヴェリーのそれは並外れていた。

何せ、彼女のオマンコと来たら、挿入する際はいとも容易くするり、と入る癖に、膣内なつかに入った途端にじゅぷっ♡♡♡じゅぷうつつ♡♡♡と、さながら餌に食いつくピラニアの様に、激しくチンポに吸いついてくるのである。

しかもそれは、キツくて痛い物では無く、柔らかくそして温かな、まるでイソギンチャクのような吸いつきであった。

処女の締まりに娼婦の柔らかさ、何て理想はよく言われるものだが、エイヴェリーのオマンコときたら、その本来ならば相反する筈の二つの特徴を、同時にかつ、極めて高レベルで備えていたのである。

一億人に一人——いいや、人の歴史を一億年遡ったとて、比肩する者が居るかどうか怪しいと、大袈裟で無く断言できる程の名器だった。

先ほど、アンドレの様子を初めて女の膣を味わった童貞の様だと例えたが、もし仮に本当に彼がそんな初心な童貞であったのなら、チンポを挿入した途端に、向こう数日勃起すら出来なくなる程に、精液を搾り取られていたに違いなかった。

別に、契約上いくら膣内出しをした所で、責められる所以は無い訳だが、単純に、鳴かせてやる、と豪語した手前、自分の方から先に我慢できなくなるのは情けなくて認める訳には行かないだろう。

「こんなもん、男のザーメンを搾り取る為に存在している様なマンコじゃねーか……」

「様な、も何も、実際そうだからね」

「あ？」

アンドレの口から思わず漏れ出した、ともすれば最悪の侮辱とすらとられかねない呟き。

しかしながら驚く事に、それに対するエイヴェリーの反応は、余りにアツサリとした肯定だった。

「つまり、ええと？新しい体を造る際に、マンコを男にハメハメされるのが得意な、ドスケベ仕様で作ったって事？」

「よくもまあそこまで下品な表現を出来ると、いつそのこと感心する位だけど、まあ概ね肯定しておくよ」

「……………今みたいな事に巻き込まれるのが嫌だっていうのなら、容姿も含めてそんな風にする必要なくね？あ、本当はエイヴェリーちゃん、エッチな事が大好きとか？」

「確かに容姿やら何やらをそれなりに抑えれば、余計な事にかかずらう時間が減るだろう、と言う事は認めるよ」

アンドレの言葉は、悪趣味な揶揄いのそれであったが、しかし的外れであるとも言いきつかった。

今しがた発覚した女性器の事然り、その煌びやかな容姿然り、性欲にかまける人間の事を下らないと断じている割には、エイヴェリーは

態々自分から被害を増やす様な選択をしている様に見える、と言う指摘は一々最もだった。

少なくともエイヴェリー自身が認めた通り、容姿だけでも普通程度に抑えておけば、彼女自身が嫌いだと公言しているような事態に巻き込まれる確率は、ぐっと減るだろう。

正しそれは飽くまで常人の尺度での話だ。

よく言えば天才、悪く言えば変人のエイヴェリーの考えは、まるで違う。

「その上で言わせて貰うけど、それなりに抑える？あり得ないよ、そんな妥協。ああ、確かに、ボクにとって自分の美醜なんてどうでも良い話だし、男を悦ばせる機能なんて以ての外さ。——けれどね、それは飽くまで自分の持って生まれた身体だったら、の話しさ。分かって貰えるとも、分かって貰いたいとも思わないけどね、これは、こだわりの問題なんだよ」

「こだわりの？」

「そう。こだわりさ。良いかい。この体は、ボクが、自身の魔術の腕の粹を凝らして作り上げた作品なんだよ？ だったら、そのありとあらゆる性能は、好むか好まざるか、使うか使わざるかに関わらず、出来る限りの高さを追求するべきで、そこに妥協なんてあつてはならないんだよ。目は彼方を見通し、耳は雑音を聞き分け、声は澄み渡ってよく通り、容姿は他者を魅了する——そんな完成度を目指すべきだ。

そしてその例に則るのなら、女性器は、その使用方法である、男の精を搾り取る機能を極限まで高めるべきだろう？ ああ、そうだね……他に例を挙げるのなら子供だって産めるよ？ 無論、行う気はないけどね」

「なんつーか、偏屈な芸術家みたいだな」

「まあ、近い所はあるかもしれないね」

そうして語られたのはエイヴェリーの、極まったこだわり。

自らの体は出来得る限り全ての性能を追求してあり、その中には色事に関する物も含まれているのだ、と。

これを誤魔化しでも、言い訳でも無く、大真面目に言っている辺りが、エイヴェリーが魔術キチと言われる所以だろう。

アンドレの言う通り芸術家や作家の、自作品に対するこだわりや、作りこみに相通じる所があるかもしれない。

エイヴェリーにとって今の体は、自分の肉体である以前に、自分が作り出した作品なのだ。

「さて……。ボクのこだわりの話は良いとして、息の方はそろそろ整ったのかな？ああ、何。本当に楽しくお喋りがしたいだけだったのなら、このまま一日中話していたってボクの方は構わないけどさ」

「……ちっ。お陰様で準備万端だよ」

「それは何より」

アンドレの会話は、本当に気になったと言うのも嘘では無いが、それ以上にあまりに気持ちが良いすぎるエイヴェリーのオマンコに慣れる為の時間稼ぎと言う面が強かった。

その目論見は当然、エイヴェリーにバレている。

しかしながら、バレていようが目標は達成できた。

アンドレを襲っていた、僅かに身を動かしただけでも精液が暴発し  
そんな射精欲は、時間を掛けた甲斐あって、多少の和らぎを見せてい  
た。

よってここからが本番だ。

「——それじゃあ、今度こそ行くぜ？」

「どうぞ、ご随意に」

「オラ、オラッ、オラあっ！」

「んおっ♡♡」

パンツ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡パンツ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡パンツ♡♡♡ぐち  
ゅっ♡♡♡パンツ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡パンツ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡パンツ♡♡♡  
♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡

力強い声が放たれて、アンドレが勢い良く己の腰を振り始めた。

楽しくて気持ち良いSEXをしている筈なのに、気分はまるで怪物  
退治。

隙あらば精液を搾り取ろうとしてくる蠱惑のマン肉を、熱くて硬い肉棒で、かき分け、耕し、打ち込みまくる。

オマンコの奥にチンポを叩きつける音と、ぐちゃりとした水音が混じった淫靡な音が部屋の中に響く。

「ーちいっ！ドスケベなマンコしやがってよお……！どうだ、どうだっ！！！！」

「あんっ♥♥んんっ……♥♥♥♥おっ♥♥♥♥」

どれだけ勢い良くチンポで突きまわしても、尚も絡みついてくるエイヴェリーのドスケベオマンコ。

一時はマシンになった筈の射精欲が、アンドレの下半身と脳内に再び溢れ出し、暴発しそうになる。

それでも彼は、力強く腰を振るのを止めはしなかった。

その甲斐あってか、それまでの前戯によって体が昂っていたエイヴェリーの口からは、どう聞いても快楽を感じているメスのそれではない、喘ぎ声が漏れ出し始める。

しかし――

「あんっ♡♡ああ、違う！もう少しだけ右だ。ひゃんっ♡♡そう、そこっ♡♡んんっ♡♡イっ♡♡♡♡♡」

「ちっ、マッサージ気分かよ……！」

「マッサージ？ふふっ♡♡言い得て妙だね♡♡そう考えれば中々悪く無いよ♡♡」

「――オラあっ！！！！」

「おっ♡♡♡♡♡ああ、気分を悪くしたのなら、あっ♡♡謝るよ？気持ち良いのは、んんっ♡♡本当だとも」

――効いてはいる。アンドレの攻めは、エイヴェリーに対して、確かな効果を見せており、間違っても意味が無い訳ではない。

しかし前戯の時と同じだ。幾ら感じさせようと、喘がせようと、それが彼女の心を折る事に全く近づかない。

未だぺらり……と魔導書を捲る手は止まらず、なんならエイヴェリ  
ーの方から、自分が気持ち良く感じられるオマンコのスイートスポッ  
トを教えて来る始末だった。

それこそ会話に出て来た通り、気持ち良く本を読めるマツサージか  
何かとしか扱われておらず、これでは空回りも良い所だろう。



そうこうしている内に、アンドレのチンポの方が我慢の限界を迎えた。

よく耐えた方だろう、並みの男ならば三擦り半すら持ちはすまい。

「ぐおっ……！射るっ……!!!!」

「おっ♥♥ひゃんっ♥♥全く、出し過ぎだ。ああ、魔術で避妊はしておくよ？どうしても、と言うのなら別に産んでも良いが、その場合は産まれた子供をキミとキミの家の方で精一杯育てる旨の契約を新たに結んでくれ。ボクたちがこの勝負でどうなろうと、自業自得だけど、その負債を子供に背負わすのは道理が通らないからね」

びゅるるるるるるるるるっっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥とオマンコの  
中に、大量の特濃ザーメンが勢い良く注がれる。

男であれば、体験する筈の無い、自分の子宮なかに子種かが注がれる感覚に、しかしエイヴェリーは僅かに堪えた様子も無かった。

それが、痩せ我慢で無い事は、彼女の下腹部に刻まれた空白の淫紋が、僅かにすら染まらないのが証明している。

そしてこの勝負において厄介なのは、凄まじい名器であるエイヴェリーのオマンコよりも、寧ろ彼女のこの性格の方であった。

例えば、凶な事なんて絶対にしない！と言う女と、相応の対価を積まれば簡単に股を開く女。どちらがセックスに持ちこみ難いか、と言われれば間違いなく前者だ。

しかしどちらが墮とし難いか、と言う話なら間違いなく後者だろう。言ってしまうえば、鉄と水だ。

鉄は、固く傷つき難いが、その代わり一旦折れたり、壊れたりすれば、容易には戻らない。

逆に水は柔らかく、形を簡単に変えるが故に、多少散らされようがアツサリと元に戻る。

ネガティブで自分に自信がない人間より、ポジティブで自分に自信がある人間の方が鬱になりやすいとはよく言った物だ。

心が折れる理由の最たる一つは、理想と現実の落差であるが故に、そもそも自信を持っていない人間は逆にダメージを受けないのだ。

貞操観念が強い女と言うのも言ってしまうえば似たような物。なまじ性に対する理想が高い故に、一度道を踏み外せば、自分は汚れてしまった……と勝手に追い詰められて行く。

実際、アンドレは、そんなセックスなんかに興味ありません！なんて清純タイプの女を、持ち前の性技でイカせまくって、セックスの事しか考えられないようなビッチに墮としてやった事が何度もあったし、彼からすればそれは容易い事であった。

しかし逆にエロい事を簡単に受け入れてしまうエイヴェリーの様なタイプを墮とすのは、容易ではない。

暖簾に腕押しとはこの事だろう。

「——はあつ。はあつ……」

「おや、そんなに息を乱して、休憩してどうしたんだい。まさかもう諦めてしまったのかな」

「ああ、そうだな」

「ふむ？」

エイヴェリーの煽りに対し、アンドレの答えはまさかの肯定だった。戦いの趨勢は既に決した。相手が簡単に堕ちる人間かどうかなど、百戦錬磨のアンドレからすれば、少しセックスをすれば判別が出来る。ハッキリいって10年——いや、100年続けたとして、エイヴェリーが堕ちるとは思えず、それが一ヶ月なんて短い時間では尚更だった。

エイヴェリーは墮とせない。ただしそれは——

「——普通にやってちゃいくら時間を掛けても無駄だな、って諦めたさ」

「ほう！手段を選ばなければどうにか出来るとも言いたげだね？」

「なあ、エイヴェリーちゃん。——性交魔術って知ってるかい？」

「……………魔術という言葉を冠して欲しくない、下劣で下品な技術だね。ボクとしては学ぶ意義は見いだせなかったかな」

「それは良かった」

性交魔術。そう呼ばれる魔術形態がある。

いや、正確に言うなれば、魔力を練り上げ術式を構築する普通の魔術と違い、魔力そのものを人体に流す工程を工夫した技術なのだが、便宜上魔術と呼ばれている。

その目的とする所は、性交——つまりはセックスに対する有効活用。ぶっちゃけてしまえば、魔力を使ってセックスを気持ちよくしようぜ！と言う技術である。

性欲とは人間の三大欲求の一つ。やはりどんな分野であってもその手の事を追求する人間は出てくるもので、性交魔術はそんな者たちで研鑽されていた技術であった。

そしてその性交魔術の何がこの場で一番脅威かと言えば、それは先も言った通り性交魔術が、普通の魔術とは似て非なるものである事だ。ただただ快楽を追求する為だけに作られた性交魔術の魔力の使い方、普通の魔術を覚える上では、意味が無いどころか、場合によっては足を引っ張りすらする。

よってその対処には、正当な魔術を学んでいる者でも——いいや、学んでいる者だからこそ、難しい部分が存在していた。

「そもそも俺ん家が没落した原因って言うのも、何代か前の当主のひいひい……爺さんが、性交魔術とそれを使ったセックスにドハマりし過ぎて、色んなもんを蔑ろにしちまったからなんだよ」

「それはそれは、キミも随分とご先祖似のようで」

そんな会話をしている内にも、一度大量に射精をして、エイヴェリーのオマンコの中で、柔らかくなっていたアンドレのチンポが、射精前と変わらぬ——いいや、射精前以上の硬さと熱さを取り戻していく。性交魔術。元より性豪と呼ばれるに足るアンドレが、それを使用した時、彼はもはや絶倫の域に至る。

これならば、至高の名器であるエイヴェリーのオマンコが相手でも、応戦は十分に可能だった。

「つーわけで、これからエイヴェリーちゃんが使うお上品な魔術とは違った、”雄の魔術”って奴を見せてやるぜ」

「……………」

アンドレの体、特に彼のチンポに魔力が満ちる。

それは女を喘がせ、狂わせ、一匹のメスに墮とす淫靡なる魔力の奔流。

「それじゃあ、行くぜ？——おらあっ！！！！」

そしてアンドレは自身のチンポをエイヴェリーのオマンコの奥に叩きつけると同時に、その魔力を彼女に対して解き放った。

淫らな魔力の蠢きが、エイヴェリーの全身に向けて迸り——

「はいはい。無効化、無効化」

「なっ……!?!」

——そして余りにアツサリと、その効果をエイヴェリーに無効化されたのであった。

アンドレの口から驚きの声が漏れる。

それは自身の性交魔術をエイヴェリーに無効化されたから——ではない。

先ほど性交魔術と普通の魔術は似て非なる物だと言う説明をした訳だが、それは逆に互いに似ている部分が存在している、という事でもある。

やはり同じく魔力を扱う技術である以上、その対処に同様の部分が出て来るのは当たり前の話だ。

そしてそうである以上、魔術の天才であるエイヴェリーに対処される事は何らおかしな話ではない——と言うより、寧ろ全く抵抗されずに喰らわれでもしたら、一体何の罠だ？と警戒せねばならない位である。

では何が問題なのかと言えば、その対処の仕方だ。

アンドレがこの場で目論んでいたのは、エイヴェリーに対し少しでも多くの労力を使わせる事。

自身の放つ性交魔術に、対応する事が出来たとしても、慣れてない魔力の使い方であるが故に、無駄な力を使わせる事。

分かり易く言うのなら、ダメージレースで優位に立つ事こそが、アンドレの目的だったのだ。

アンドレがⅠの魔力で行った攻めに対し、エイヴェリーがⅡの魔力で防御を行えば、何れは勝負の天秤が傾いてくるのだから。

しかしながら、今のエイヴェリーの対応は完璧だった。

Ⅰの魔力に対し、Ⅰどころか、0.5、あるいは0.1の魔力で防御をしてみせたのである。

ただのセンスでは説明が付かない。これは明らかに、性交魔術と言うものを熟知し、効率的に扱う術を知らなければ出来ないことだった。

「……性交魔術を学んでいたってのか」

「そうだね。Ⅰつ、いいやⅡつ程言わせて貰おうかな。まずボクは、こと魔術が関係する事象において、自ら試しもせず低俗だと切り捨てたりはしない。そしてもうⅠつは――何というかキミたちって本当に似た様な事をするよね。これでボクに自信満々に性交魔術を披露してきた男は、両手を使っても数え切れなくなってしまうたよ」

「俺が性交魔術を使ってくる事を読んでいたって……？」

「まあ、流石に性技だけで相手を墮とせると思って無策で、相伝魔術を賭けるほどの愚か者だ、とまでは馬鹿にしていなかったよ？その上で、魔道具や薬の使用禁止を飲んだ以上、大体そんな所だろうとアタリは付いていたかな」

これもやはりエイヴェリーの秀囲気が為せる事か。彼女が綺麗な魔術しか使わない優等生タイプだと勝手に決めつけて、自信満々に性交魔術を使ってくる男はこれまでも沢山いたのだ。

性交魔術に対しては、一通り試したあと早々に見切りをつけ、故に普通の魔術に比べれば遥かに少ない研鑽しか積んでいないエイヴェリーだが、それでも並の術者など寄せ付けない程度の腕は持っているた。

「さて、それじゃあそろそろ、ボクが知っているお上品な魔術とは違った”雄の魔術”って奴を見せて貰っても構わないかな？先程から楽しみで、魔導書を捲る手が〇。」一秒ほど遅れているんだ」

「——くそっ。何時までも、防御しきれれると思うなよっ!!」

まだ一度防がれたただけだ!とアンドレが性交魔術を使ったセツクスを再開する。

「キミも頑張るねえ……」

「言ってる!」

パンツ♥パンツ♥パンツ♥パンツ♥パンツ♥パンツ♥パンツ♥  
ンツ♥パンツ♥

何度も何度も、チンポをマンコの奥に叩きつけ、その度に魔力を送り込む。

……しかし、その度エイヴェリーに完璧に無効化される。

「それならこれで——どうだっ!？」

「落第だ、出直してきたまえ」

魔力の波長を変えて柔軟に攻めるも、やはり容易く対処される。

最早、エイヴェリーの性交魔術の腕に疑い様は無かった。

攻める、守られる。

攻める、守られる。

攻める、守られる。

攻める――

「おっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「――っ。テメエ……!!」

「ふふっ、ごめんごめん。後少しで絶頂出来そうだったから、つい、ね？」

初めてアンドレが放った淫らな魔力がエイヴェリーに突き刺さったが、それに対してアンドレの口から出て来たのは得意げな声ではなく、悔しそうな声だった。

何故なら、エイヴェリーが態と喰らったのが明らかだったからである。

これは完全に遊ばれていた。

「ちくしょう、射るっ――！」

「全く、何度も何度も出して良く飽きない物だね。——さて未だ続けるのかな？」

都合何度目になるのか分からない射精。

性交魔術のお陰でアンドレの肉棒はまだまだ元気ではあったが、これではどれだけ時間を掛けようが、意味があるとは思えない。

状況は完全にエイヴェリー有利であった。

……ここまで。

淫紋完成度……0%

第三章..”分からせ”の始まり

「はあ……、はあ……、はあっ……」

「さて、随分と色々試して見ていた訳だけど、勝負に勝てる算段は付いたのかな？個人的には時間の無駄を避ける為に、早々に諦めることを推奨するけどね」

そして、大凡一時間程の時間が経過した。

当初、後背位<sup>バック</sup>の姿勢でセックスを行っていたエイヴェリーとアンドレだが、今では互いに向き合う正常位の姿勢になっていた。

それはアンドレからの要望だった。

姿勢を変え、その他にも様々な攻め方を試し、エイヴェリーの守りを崩せないか試行錯誤をしたのである。

しかしその努力が実らなかった事は、未だにエイヴェリーが仰向けのまま、魔導書をペラペラと捲って読んでいる姿から実によく分かる。

結局、アンドレが使った性交魔術は全てエイヴェリーに無効化されてしまった訳だ。

もうこれ以上続けた所で何の意味も無いことは誰の目から見ても明らかだった。

それは今この時のSEXに対してだけの事ではなく、この勝負その物に対して、でもある。

エイヴェリーとアンドレが、互いに命以上の物を賭けた勝負を始めてから、まだ一日。

しかし勝負の趨勢はもう見えた。

これがアンドレの全力で彼の用意していた全てなら、一日だろうが、一ヶ月だろうが、なんなら100年だろうが、エイヴェリーの勝利は揺るがないだろう。

それを理解したからかどうかは定かでは無いが、アンドレの表情が変わる。

勝負を始めた当初の、チャラくて軽そうな感じでも、今しがたまで見せていた自分の打った手を簡単に捌かれて、驚愕と疲れを見せる感じでもなく、深く、深く、思案して、さながら遠大で緻密な計画を立

てている最中の指揮官の様な表情に。

「そう……だな。エイヴェリーちゃんがここまで性交魔術に精通しているとは思わなかったぜ。正直な所、まいつてるよ」

「ふむ。殊勝な事を言っている割には、まだやる気満々の様だけど？」  
諦めた様な言葉と共に、アンドレは腰を引いていた。

しかしそれは、SEXを止める為ではなく、寧ろ逆にチンポを再び勢い良くオマンコの奥に叩きつける為の準備である事は明白で、つまりアンドレは勝負を諦めてはいなかった。

「いや、まいつているのは本当だよ。こんなことなら……って後悔してる」

「こんなことなら、勝負なんてするんじや無かった、って後悔かな？」

「ああ、いや——こんな事ならハナから真面目にやっどくべきだったなっ、てな」

「——は？」

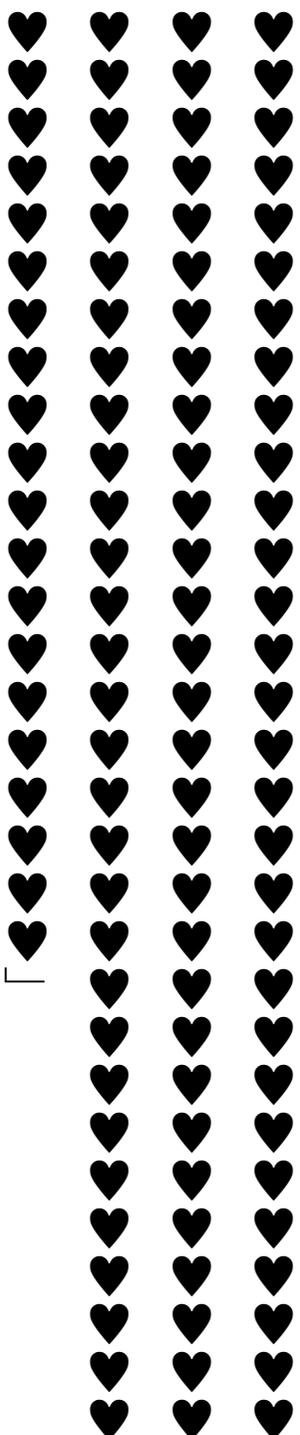
パァンっっ  
♥♥♥

不吉な言葉と共に、性交魔術を籠めたアンドレのチンポがエイヴェリーの子宮に叩きつけられる。

それは今日、何度も、それこそ100度以上見た光景だ。

よって当然、今までと同じ様に平然と対処出来るのが普通の筈で――

「おっおっほっおっおっおっおっおっおっおっおっおっお



――しかし部屋の中に響いたのは混じりつけ無し純度100%のメスの絶叫だった。

エイヴェリーのオマンコからぷしゃああつつっ♥♥♥と大量のアクメ汁が噴出される。

明らかなる異常事態。

退屈なる睦事は終わりを告げ、ここに真なる淫宴が開幕した。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*







当然、こんな隙だらけのエイヴェリーを、アンドレが見逃すはずも無い。

ピストン運動が再開され、ぬちゅっ♥♥♥ぐちよっっ♥♥♥と性交魔術が籠められたチンポが、エイヴェリーのオマンコの中を好き勝手に蹂躪しだした。

ぬめつく膣の内壁が、熱い肉棒に制圧される。オマンコの奥から、子宮を通り、脳髄までをも突き抜ける快感に、エイヴェリーはやはり再び、無力なメスイキをさらけ出した。

こんな状態で、マトモな思考も、対応も取れる筈がない。

——しかしエイヴェリーは天才だった。

(ぼうへきっ……♥♥♥防壁をはるんだっっ♥♥♥れいせいにつ♥♥♥かんぺきにいつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥)

エイヴェリーは、いつの間にか崩されていた、性交魔術を防ぐための魔術防壁を再び己にかけ直す。

こんな極限の状態で、普通ならば成功する筈がない。







そもそもエイヴェリーは、勝負が始まる前の会話や、交わされた契約の特記事項の内容からも分かるように、余裕綽々で何一つ危機感を抱いていない様に見えて、魔道具や、薬、そして数の暴力などで自らがどうにかされてしまうのを、強く警戒していた。

故に、彼女が強い要望で押し通した部分の特記事項は、それらを封じる為の物であった訳だが、こんな風になった以上、そこに何かしらの穴があった——そう思うのは思考の流れとしては、決しておかしい物では無いだろう。

よっておかしいのはここからだ、見つからないのだ穴が。

こんな明らかな異常事態が起こっている以上、極めて重大な落とし穴が契約に存在している筈なのに、いくら桁外れの快樂で思考が乱されているとは言え、それが少しも分からないのだ！

その事が、ただでさえ混沌の極地にあるエイヴェリーの頭を、さらなる混沌へ導いていた。

それもその筈——何故なら彼女が交わした契約に穴など無いのだから。

初めに断言しておこう。

エイヴェリーの交わした契約に、重大な落とし穴など無い。

この契約は彼女の目論見通りに、アンドレの小細工を封ずる効果を発揮している。

それにもし仮に何かしら契約をすり抜けるような汚い手をアンドレが打ってきたとしても、エイヴェリーの魔術の腕ならばそれらに完璧な対応が可能だった。

如何なる鍵開けも通じない、堅牢無比な南京錠。

それがエイヴェリーと、彼女が交わした契約内容を表現するに相應しい比喩だった。

そしてならばこそ、どうしてこんな事になってしまっているのか？  
話はやはりそこに原点回歸してくる訳だが……



それを無理やりこじ開けるにはどうすれば良いだろうか？

とても簡単な話だ。ドアを爆薬で吹っ飛ばしてしまえば良い。

正攻法で、ドアごと破壊出来る力があるなら、鍵など何も意味をなさないのだ。

そしてエイヴェリーが交わした契約に落とし穴など無い、と先ほど断言した訳だが、それは1つのある前提条件の元に成り立つ話である。

即ち——エイヴェリーの実力がアンドレよりも高い事。

そうエイヴェリーは、自らの実力がアンドレよりも圧倒的に高いという前提の下、勝負に挑んだのだ。

そしてそんな己より圧倒的に格下なアンドレが、自分に勝つためには、本人以外の何かしらの力を利用した、小細工や汚い手を使うしかない、と決めつけて、それを封じるのに全力を尽くしたのである。

アンドレの実力が己を超える物である可能性など、エイヴェリーは今に至るまでそれこそ毛の先ほども考えはしなかったのだ。

それは天才ゆえの傲慢——そう言い切ってしまうのは、些か乱暴だろう。

例えば、その道の一流の人間の腕前の数値を100とするのならば、エイヴェリーの魔術の数値は1000を軽く超える事だろう。対するアンドレのそれはどう高く見積もっても、50や60が精々——それも歴史の長い貴族の高い基礎性能があつての事だ。

これで相手に負ける可能性を考えるのは、慎重ではなく臆病のそれだろう。

獅子は兎を狩る時にも全力を尽くす、とは良く言うものだが、それは飽くまで物事には全力を持って取り組めと言う意味であつて、何でもかんでも相手の評価を高く持てと言う事ではない。

兎が自らを食い殺すと想定する獅子はいないし、仮にいたとしたらまるで狩りが出来ずに餓死するだけだ。

よつて、エイヴェリーがアンドレよりも己の事を高い位置だと想定したことは、そこまでおかしな事では無かつた。

問題は、今回の勝負に必要なだったのが魔術の腕ではなく、性交魔術の腕だったという事だろう。エイヴェリーとて、そちらの腕前は、魔術のそれに比べれば遥かに落ちるのだから。

……しかし、とは言っても、それも本来ならば問題にならぬ筈ではあった。

エイヴェリーの性交魔術の腕が魔術の腕より大幅に劣るのは事実とはいえ、それでも先程の例に則るのなら、200くらい——つまりはその道の一流を大きく超すレベルの腕前は持っているのだから。

だからこそエイヴェリーは決して問題にはならないと想定して——しかし300の腕前で叩きのめされた。言ってしまうえば今回の話はそれだけの事、いつそ清々しいまでに正攻法である。

世の中には、他の部分の才能はそこまでののに、特定の分野にのみ凄まじい才を見せる人間、と云うのが存在する。

こと魔術においても、一族単位で一部の魔術を専攻することもある以上、そういった事例は比較的多かった。



先程までの軽い態度が嘘の様に、アンドレは獲物を追いつめた熟練の狩人ハンターの様に、エイヴェリーの事を的確に、冷静に追いつめる。

アンドレが女好きで、魔術の腕が低いと言うのは本当のことだろう。流石にそこが全くの演技であったのなら、それを見抜けないほど、エイヴェリーは節穴ではない。

しかしアンドレはおそらく、過剰に己を愚かしく見せていたのだ。最も上手な嘘の吐き方は、そこに真実を混ぜる事。

彼はそうやって、何の取り柄も無い愚かしい人物を演じつつ、その裏で性交魔術という牙を磨き続けていたのだ。

こうなつてくると、ただ女好き故にこんな勝負をしているというのも怪しい物である。

初めからエイヴェリーが狙いだっただのか、それとも偶々エイヴェリーが彼の求める何らかの条件に一致してしまったのか、それは分からない。



「これでボクの勝ちだね」

「ば、馬鹿な。こんな筈じゃ……!?」

勝負から一ヶ月。エイヴェリーはアンドレに対し華々しい勝利を収めていた。

エイヴェリーにとってこれはいつもの事。常人が危険だから、と足踏みするような物事を、彼女はいつだって己の意思と才能で乗り越えてきたのだから。

「ふふふ、まあキミの企みも悪くはなかったから、そう落ち込まなくても良いと思うよ。ただ、相手が悪かっただけさ。さてそれじゃあ相伝魔術は貰っていくよ?」

「……?そ、それは……っ!それだけは許してくれっ……!!!!」

哀れ。地に手を付けて許しを請うアンドレ。

しかし、エイヴェリーは彼に無情なる裁定を下した。

「おっと!今更それは無しさ。悪いけど勝負は勝負。泣いても謝っても、貰うものは貰っていくよ」

「そ、そんな……」

「まあそういう訳だから、話はこれでおしまい。それじゃあボクはそろそろイクよ——」

完璧なる勝利の余韻に浸り、絶望するアンドレを尻目に、エイヴェリーは歩み始めた——現実へ。



「――まっ♥♥まへっ♥♥まっ♥♥まっへくれっ♥♥♥♥一旦、やすませて  
――おほおおおおおおおおおおっっっっ♥♥♥♥♥♥♥♥」

混乱する頭で、思わず許しを請うたエイヴェリー。

しかしそんな彼女にアンドレから無情な裁定が下される。

「おっと！今更それは無しだぜエイヴェリーちゃん。悪いけど勝負は  
勝負。ヤル事はやらせて貰うからよ」

「そ、そんなにやっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥いぐうううっっっ  
♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

そして、セックスを始めた当初の余裕が嘘のように、アツサリとイ  
カされてしまう。

今のエイヴェリーは好き勝手に騷られ続ける、アンドレのアクメ人  
形に過ぎなかった。

「ふーっっ♥♥♥♥♥♥ふーっっ♥♥♥♥♥♥」

(た、耐えろおおつつ♡♡♡耐えるんだああつつ♡♡♡そうして  
何とか反撃の糸口をおっ♡♡♡それしかないつつ♡♡♡)

「おっ、目にやる気が戻ったじゃん。そう来なくっちゃ面白くねーぜ」  
しかしながらそれが、きつけにはなったのだろう。エイヴェリーの  
微睡んでいた意識は完全に覚醒し、その意思の強さを取り戻した。

彼女は、絶体絶命な状況の中、それでも光明を見出そうと、必死に  
耐える姿勢に入った。

しかしそんな彼女に、アンドレから更なる追撃が加えられる。

「エイヴェリーちゃんも準備が出来たみたいだし、それじゃあそろそ  
ろ馬鹿の一つ覚えで腰を振るだけなのを止めにくくな。それじゃあ  
まずはその美味しそうな乳首を頂くとするかな——覚悟、キメとけよ」

「——っ！♡♡♡♡♡」

(ち、ちくびいつ……♡♡♡♡♡コイツに弄られたら一体どれ程のっ  
……♡♡♡いい、いや弱気になるなっ♡♡♡襲ってくる快樂を予測し  
てっ、何とか耐え抜いてやるうつつ♡♡♡)

アンドレの両手が、エイヴェリーの乳首にゆ〜っくりと、迫る。

それは本来何の変哲も無い動作。しかし今のエイヴェリーにとっては、ドラゴンブレス竜の息吹をも凌駕する恐ろしい物に見えて仕方が無かった。

魔術による防御は先ほどと同様に、意味をなさないだろう。

よってエイヴェリーに出来たのは”覚悟”を決める事だけだった。肉体的な物か、精神的な物かに関わらず、人間が最もダメージを受けるのは、それが想定外の代物であった時だ。

例えば同じ無抵抗で殴られるにせよ、本当に何の脈絡もなく、通りますぐりの通行人からぶん殴られるのと、今から貴方を殴ります、と予告されてから殴られるのでは、受けるダメージは雲泥の差の筈だ。

きつと快樂も同じこと。故にエイヴェリーは覚悟を決めたのだ。

今から自分に襲い掛かって来るであろう地獄の様な快感の津波の量を、先程までに味わった快樂から予測し、推測し、それを耐えるのに必要な量の意思をかき集める。





エイヴェリーは自らの乳首を金属製のニップルリングで覆い隠しているのだが、むぎゅ♡♡♡むぎゅうつつ♡♡♡♡♡とエツチな擬音が鳴って来そうな程、本来ならば完全に覆い隠されていた筈の乳首の肉が、リングからはみ出して来ているのだった。

妖精の様に可愛らしい乳首が、まるで淫魔のモノであるかの様なドスケベ仕様になってしまっている訳である。

明らかに尋常な事ではない。

「ボクのっ♡♡♡♡♡ボクの体に何をひたあぁっ  
…♡♡♡♡♡」

「いや、そんなに大した事はしてねえよ。ただ普通に体を弄らせて貰ってただけさ——エイヴェリーちゃんが気持ち良くおネンネしている間中、ずっと、な？」

「しよ♡♡♡♡♡しよれだけでこんなっ…♡♡♡♡♡」







エイヴェリーの思考はそこにたどり着いてしまった。

セックス中に意識を失うと、意識を失っている間は勝負のカウントダウンが進まない。

つまり、今回の様に意識が飛ばされると、そこから覚醒するまでの間、好き放題に体を弄ばれるのに、勝負のカウントは進まないと言う、アンドレにとってのボーナスタイムが始まってしまふのだ。

それは間違いなく、意図されたモノだ。何故なら、それらの特記事項は、アンドレからの要望を持って契約に入れられたのだから。

だからエイヴェリーは、地獄の快樂に対する反射運動で涙に濡れた瞳をキツ……！と鋭くしてアンドレを睨んだ。

「おいおい、そんな風に俺がエイヴェリーちゃんを罫に掛けた、みたいな態度を取られるのは心外だぜ。俺としては極々当然の、勝負に乗る上で最低限の要求しかしていないつもりなんだけどな？だってほら、例えばヤツてるヤツてない関係なしに制限時間が減っていったら、エイヴェリーちゃんは逃げ回るだけで勝てちゃうだろ？」

「……くうっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

この話の何が一番たちが悪いのかと言えば、アンドレがエイヴェリーを罠に掛けたのは間違いないのだが、しかし言っている事の理は彼の側にあると言うことである。

セックスの最中にしか制限時間が進まなくするのは当たり前の話だろう。その制限を設けなければ、アンドレの言う通りただ逃げ回っているだけで勝負が終わってしまうのだから。

意識を失っている最中は制限時間のカウントが進まないと言うのもそこまでおかしな要求ではない。

極端な話、エイヴェリーが魔術を使って冬眠的に一ヶ月間眠りにつけばそれで勝負はついてしまうし、彼女にそれが可能かどうかと言えば可能なのだ。

そして問題の、エイヴェリーが気を失った間も、アンドレは彼女を好きに弄んで良いと言うことだが、これも一見すればアンドレに非常に有利なルールに思えるが、よくよく考えれば当たり前の話だ。

何故なら、エイヴェリーがセックスの最中に快楽で意識を失う、と言うのはアンドレがエイヴェリーをやり込めた、と言うことだ。そうだとするに、意識を失ったからそこで行為は一旦中断で、エイヴェリーは目を覚ますまで休んで仕切り直す事が出来ます、なんて事になったら、そちらの方がよほど不公平だろう。

そもそも契約の特記事項に、己の勝利のためのピースを入れ込んだと言う話なら、エイヴェリーだって魔道具や薬、第三者の協力を封じる特記事項を押し通したのだ……勿論、それだってエイヴェリーだけが得をする内容ではないが。

あの物々しい『破れぬ誓い』の特記事項は、一見何かしらの罠が仕掛けられている様に見える、実際互いの思惑が入っているのは間違いないが、しかしその実、どちらか片方だけが一方的に不利になるようなアンフェアな罠は一切仕掛けられていなかった。

……ただ、エイヴェリーもアンドレも、両者ともに己が相手を実力で上回っている事を前提として、特記事項を作り出した。

その結果として、有利な側が更に有利になり、不利な側が更に不利になる様な、実力が高いものが、より勝利に近づきやすくなる総取りの契約となっている、と言うのが事の真相だ。

現状、不利になっているのがエイヴェリーだから、彼女に都合が悪い契約に見えるが、もし仮に彼女がアンドレの性交魔術を捌き切っていたのなら、そこから逆転につながる様な細工を全て封じる契約として機能したはずだ。

つまるところ結局何が悪いのかと言えば、エイヴェリーが性交魔術で無様に負けたのが悪いのだ。

それが分かってしまったから、エイヴェリーも悔しそうに口を噤んだのだ。

少なくとも、自分も似たようなことを画策していた事を棚に上げて、アンドレを卑怯だと糾弾しない、公平さと、意地と、誇りが彼女にはあった。





今度はクリトリスが乳首のように、ドスケベサキュバス仕様に墮とされていた。

クリリングを、肥大化したクリトリスが内側から、むぎゅっ♡♡むぎゅっ♡♡と押ししている。

そんなドスケベクリを刺激されて、エイヴェリーは再び淫らな夢旅行に誘われた。

二時間後。

「さ。エイヴェリーちゃん。今度はキスイキを覚える時間だ」

「んむっ!?♡♡♡んーっ!♡♡♡ふあっ♡♡♡はうっ♡♡♡」

(な、なんでえ♡♡♡キスしているだけで、気持ちよくうっ♡♡♡い、いきがあ♡♡♡♡♡♡♡♡♡)

眠り姫を起こすが如く、エイヴェリーの口がアンドレに無遠慮に奪われた。



だと言うのにそこから子宮に快感の電流が突き抜けて、エイヴェリ―は堪らず喘ぎ声を上げてしまった。

指で下腹部を押される度に、アクメが繰り返され、それはさながらアンドレの言う通り、押せばメスイキをするメスイキスITCHだった。何とかその断続的な刺激に慣れてきた、と思った瞬間今度はオマンコに挿入されたままのチンポに内側から子宮の入り口を強くノックされ、エイヴェリ―の意識は淫靡な絶叫と共に消え去った。

――そして勝負開始から10時間後。

「ふー。射<sup>だ</sup>した、射<sup>だ</sup>した。おっとそろそろ時間かな。いや、ルールは守らなくっちゃな」

「おっっっ♡♡♡ほっ？♡♡♡ほへっ……♡♡♡あう♡♡♡いくっ

♡♡♡♡

行為が終わった後のエイヴェリーの姿は、それはそれは無様な物だった。

意識は朦朧とし、顔は涙と、涎でびしょ濡れ。

性感帯はぷっくりつつ♡♡♡と勃起・肥大化してドスケベに。

びくんっ♡♡♡びくんっ♡♡♡と轢かれた蛙の様に体が定期的に痙攣して、その度にオマンコから、潮とアンドレの精液が入り混じった濃厚なセックス汁を噴出している始末。

勝負を始めた当初の、クールで余裕気な姿など、最早一ミリも残っておらず、ここに居るのは無様に分からせられたメス犬でしかなかった。

しかも極めつけは――

「大体、ω割って所か。ま、順調だな、くくっ……！ほら、擦ってやるよ」

「あう〜♡♡♡あう〜♡♡♡っ♡♡♡♡♡♡」

淫紋を優しく擦られて、微睡んでいるエイヴェリーが心地よさそうな声を漏らす。

その淫紋。勝負の行方を示す印が——ω 割程塗りつぶされていた。勝負を始めた当初は、まるで塗りつぶされてなどいなかっただけなのに、結局終わってみれば、たった一日でω%も心を折られてしまったのだ。

「それじゃあ、10時間もお疲れ、エイヴェリーちゃん。いや、2時間とちよつと、つて言ったほうが良いかな？ ハハッ！ まあ何にせよ、明日もまた、よろしくな？」

「はえ……？ ♡♡♡♡♡♡♡♡」

そして何より、実際の時間にして10時間も飛ばれていたというのに、勝負のカウントダウンは2時間と少ししか進んでいなかった。

しかもそのカウントの大半は、最初のアンドレが性交魔術の実力を偽っていた時に稼いだものであり、本気を出されて以降は殆ど時間を稼げていないのだ。

そんな僅かにしか時間を進められていないのに、こんなになるまで調教をされてしまった。その絶望的な事実には、意識が朦朧としているが故に、覚醒するまでは気がつけないのは果たして、幸か、不幸か。何にせよ、これが始まり。

エイヴェリーを完膚なきまでに墮としていく宴の開幕であった。

淫紋完成度……30%